

2016年度 中央大学特定課題研究費 ー研究報告書ー

所属	文学部	身分	准教授
氏名	羽根礼華		
NAME	HANE Reika		

1. 研究課題

（和文）イルゼ・アイヒンガーにおける仕事と無為

（英文）Work and Idleness in Texts of Ilse Aichinger

2. 研究期間

2年間

3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600字程度、英文 50word程度）

（和文）

労働は、ヨーロッパ市民社会において、勤勉・有能・誠実といった道徳的・精神的価値を含意する概念として、貴族階級の特権であった閑暇（Muße）の上位に置かれ、イデオロギー的性格を帯びるようになった。「無為の文学」、すなわち、無為をテーマやモチーフとする、あるいは無為を文章構成やレトリックにおいて体現する文学は、上のような状況を背景に登場した労働批判の言説の一形態である。

本研究は、オーストリアの作家イルゼ・アイヒンガー（1921–2016）の作品の中から、「無為の文学」の特徴を示すものを取り上げて論じる。ナチ支配の時代（1933–45）は、近代に始まる精神的・道徳的観点からの労働の重視が、暴力支配を支えるイデオロギーとして機能するに至ったと共に、労働が直接的暴力となった時代であった。本研究の目的は、「アウシュヴィッツ以後」という歴史的・文化的文脈の中で書かれたアイヒンガーの「無為の文学」の特異性を明らかにすることである。

本研究では、これまでに、①1800年頃から現代までのヨーロッパにおける「無為の文学」の系譜の中にアイヒンガーの作品を位置づけつつ、アイヒンガーの作品の特異性を明らかにした。加えて、②アイヒンガーにおける仕事批判と言語および権力批判の結びつきを分析した。現在は、③1900年以降のヨーロッパにおける言語批判の言説、とりわけ「アウシュヴィッツ後」という文脈における言語および権力批判の言説の中に、アイヒンガーの「無為の文学」を位置づけている。

（英文）

My research aims to point out features in texts by the Austrian author Ilse Aichinger which discuss or/and embody idleness. It (1) analyzes them in respect to the European tradition of literary engagement with idleness, from around 1800 to today; (2) shows the correlation between Aichinger's critique of work and her critique of power and language; and (3) relates the latter to the critical discourse on language of the 20th century, especially in the historical and cultural context of the Nazi era and the post-war period.